

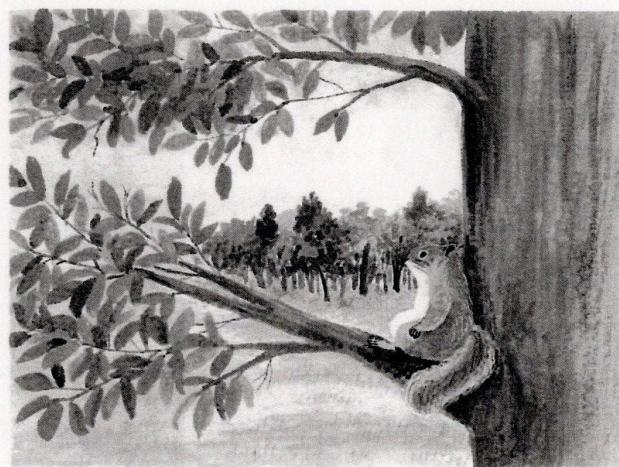
春風をたどつて

如月 かずさ
かめおかあきこ 絵

1. 「旅に出たいなあ。」

2. りすのルウは、さいきん、そんなことばかり言っています。

3. 心をうきうきさせるような春風が、高い木のえだにすわったルウのしつぼをくすぐつけています。それなのにルウは、ふさふさしたしつぼをたいくつそうにゆらしながら、たから物のことを思い出していました。



4. ルウのたから物は、風の強い日にどこからかとばされてきた、たくさんのはしゃいんです。はしゃいにうつっていたのは、青くすき通った海に、雪をかぶった白一色の山々、黄金にかがやくさばく。どれもルウが見たことない、すばらしいけしきばかりでした。

「それにくらべて、この森のけしきってさ、ぜんぜんわくわくしないよね。」

5. 見なれたけしきをながめて、ルウはためいきをつきます。

6. 海や雪山やさばくのことをルウに教えてくれた、森で一番のもの知りりすも、それらがどこにあるのかまでは知りませんでした。ちっぽけなりすにはたどり着くことができない、遠い遠いばしょにあるのだろう、とも言つていました。

「それでもぼくは、いつかぜつたい、はしゃいんのけしきを見に行く

んだ。」

7. そのとき、クルル、とルウのおなかが鳴りました。そろそろお昼ごはんの時間です。ルウは、みがるに地上に下りて、お昼ごはんに食べる木のみをさがし始めました。

8. 「さいしょに行くのは、やつぱり海がいいな。なんていっても、とくべつきらきらしてきれいだもん。」

9. しゃしんで見た海のけしきを思いうかべながら、ルウが森の中を進んでいくと、顔見知りのノノンのすがたを見かけました。

10. ノノンは、とてものんびりおつとりしたりします。目をとじたままでじつとしていて、ねているのかおきているのか、分からぬこともあります。そのせいで声をかけづらいので、ルウは、ノノンとよくあります。そのせいで声をかけづらいので、ルウは、ノノンと

あまり話したことがありません。

11. ノノンは今日も、ねむっているように目をとじていました。ですが、よく見ると、そのはなが、さかんにくんくんと動いています。ルウはそれが気になつて、ノノンに話しかけてみました。

「ノノン、何をしてるの。」

「わあ、びっくりした。あのね、なんだかすてきなにおいがするんだよ。」

ノノンがおつとり答えます。ルウも、ためしににおいをたしかめて、それから首をかしげました。



「めずらしいにおいは、とくにしないみたいだけど。」

「においが弱くて分かりづらいんだよ。でも、本当にすてきなにおいなんだ。たぶん、こっちの方からしてくるんじゃないかな。」

12. ノノンは、ガサガサと近くのしげみに入つていきます。少しまよつてから、ルウも、その後についていってみることにしました。

13. 前が見えないほど深いしげみを、ルウは、草をかき分けながら進みます。すると、そのうちに、知らないにおいに気がつきました。さわやかで、ほんのりとあまい、とてもすてきなにおいです。

「ノノンは、こんなにかすかなにおいに気づいてたんだ。」

ルウはびっくりして、ノノンのせなかを見つめ

ました。

14. しげみは、どこまでもどこまでもつづいています。ルウはだんだんつかれてきてしまいましたが、前を行くノノンが足を止めるけはいはありません。においのしてくる方へむかって、まっすぐに、どんどん進んでいきます。その様子はまるで、ルウが知っているいつものノノンとはべつのりすのようでした。

15. それからどれだけ進みつけたのでしょうか。しげみがやつとどぎれたかと思うと、あざやかな青い色が、ルウの目にとびこんできました。



しげみのむこうにあつたのは、見わたすかぎりの花ばたけでした。そこにさく花の色は、ルウが行きたいとねがつていた、しゃしんの海にそつくりな青。そのけしきのうつくしさに、ルウの口から、ほう、とためいきがこぼれました。

「すごいや。この森に、こんな花ばたけがあつたんだね。」ルウはノノンに言いました。ところがノノンは、ルウの声が聞こえなかつたかのように、うつとりと花ばたけに見とれています。

17. そんなノノンの様子をながめながら、ルウは思いました。ぼく一人だつたら、この花ばたけを見つけることはできなかつただろうな、と。

「すごいや。」

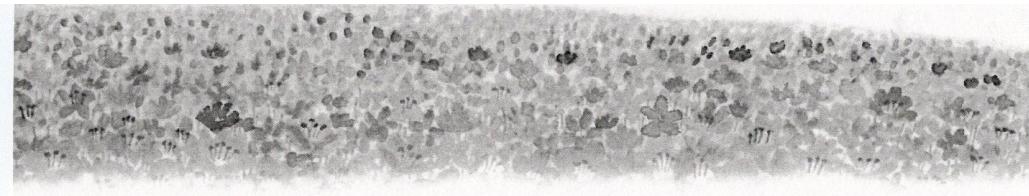
ルウは、そうくりかえしてにつこりすると、だまつて花ばたけの方をむきました。さわやかな花のかおりにつつまれて、ゆつたりと時がながれていきました。

18. しばらくたつたころに、ノノンがのんびり言いました。「そろそろお昼ごはんをさがしに行こうかな。ルウはどうする。」

19. そういえば、ぼくもごはんがまだだつた、とルウは思い出しました。けれど、気づいたら、ルウはこう答えていました。

「ぼくは、もう少しここにいることにするよ。」

「分かつた。じゃあ、またね。」



「うん。また話そう。」

20. ノノンを見おくつた後で、ルウは、また花ばたけをながめました。

21. やわらかな春風が、花たちとルウの毛を、さわさわとなっていました。海色の花びらの上で、昼下がりの光が、きらきらかがやいています。ルウのしっぽは、いつのまにか、ゆらゆらとおどるようになっています。

22. 花ばたけの空気をむねいっぱいにすいこんで、本物の海もこんな

いいにおいがするのかな、とルウはそうぞうしました。

23. その夜、ルウは、すあなでたから物のしゃしんをながめていました。きれいだなあ、いつか行つてみたいなあ、とうつとりしながら。

「だけど、あの海色の花ばたけも、とってもすてきだつたなあ。」

ぽつりとつぶやいてから、ルウはふと思いつきました。

「そうだ。ぼくの知らないすてきなばしょが、ほかにもまだ、近くにあるかもしれない。あした、ノノンをさそつて、いっしょにさがしてみることにしよう。ノノンといっしょなら、またあの花ばたけみたいなけしきを、見つけられそうな気がするから。」

24. そんなふうに考えてわくわくしながら、ルウがねどこにねそべると、花ばたけからついてきたさわやかなかおりが、ふわりとルウのはなをくすぐりました。

